

2024年7月19日(金)渡辺宗修業躰 市ヶ谷加賀町東京道場の二階の座敷でのご指導。金曜別科約67名。

科目： 行之行台子 初炭／ 行之行台子 ／濃茶付花月

■行台子初炭

開始時。天板の上には、八卦盆の上に、茶入。左側に羽と香合が置かれている。

急いで歩かないように。

はじめ、炭斗をもって、そんなに左に歩かなくてよいですよ。(とおっしゃった。)

羽は、持つ手の場所をもっと炭斗近くに。

火箸を取り出す時、身体を起こしてくれば、自然に自分の方に上がってくるでしょう。

鉄を掛ける時。四分の一ですよ。

月形を切る手の柄は、あまり根元を持つとやりにくいですよ。

扱って取った道具(この時は灰匙)は、扱って(逆に)戻すように。

火箸を持ったら、先を揃えて。それではまだ揃ってないですよ。そう揃えて。(羽で清める)

お点前(手前)さん(:紺色のような濃い色の着物を着て、(河村の知り合いの江川和子さんに少し似た)背の高い人)は、火箸を杓立てから取り出す時に、初め全然下まで降ろさない人で、そのまま高い位置でご自身の位置に取ろうとされるので、渡辺先生が、下から3センチ(1寸)の位置ですよと声をかけられるが、ほとんど実行はできない。アの字の書き方が少し変。

■行之行台子

渡辺先生は、お点前さんが、天目台・茶盃・お盆などを持つときに、左右、或いは右左と手をきちんと差をつけて持つということなどについては、ご注意はされなかった。また、火箸の通り道も、火箸も柄杓も、(低いところは通っていたけれど、)3時くらいの方向から取り出していたけれども、これもなにもおっしゃらなかった。[金沢宗維先生は厳格。一生言い続けるとのことで、火箸は向こう。柄杓は手前正面。陰と陽との意味でやっているから、理屈通りではっきりやるようにしてほしい。一度、御家元のされることを遠慮して、少し違う方向から抜いた場合があつて、それが広まってしまうたりしたものもあり、大変みんないい加減にあいまいなことが広まっているけれども、家元はきちんとされておられますよ。とのこと。研究会でおしゃられていた。]

水指の蓋は、人差し指と親指の二本で持つんですよ。あとの指は、なんというかそれに添えられているだけで。そんな風に持ったら変ですよ。

茶杓の持ち方。横からこうして持たないと持ちにくいです。

(清拭きするときに、お点前さんは、一度押し二度抜きしていたが、とくにこれについても、明快ではなかったけれども何もおっしゃらなかった。)

手を揉み手するとき、そんなに手を振り回す必要はないです。化粧品を毎朝広げるでしょう。まあ冗談ですが、そんな感じでいいんです。そんなに振り回さないでしょう。

(茶杓を拭くとき、お点前さんは、少し帛紗を緩めて膨らませていたが、特にそれも、そのまままっすぐ拭くようにとはおっしゃらなかった。)

茶巾で天目茶盃を拭くとき、もうすこしはっきりと、はじめの「い」の時は、内側の側面あたり。「り」のときは、しっかり底を拭きあげると丁寧に扱っているように見えます。

茶を点てる時に、水を入れる必要がないと判断したら、水を入れる必要はないのですよ。(とのこと。置き柄杓・切柄杓の順番が変わることについては、どうなりますかという質問を思ったができなかった。)

そんなに前かがみにならないように。おばあさんがお点前しているように見えますから。
茶入はゆっくり回せばいいですよ。

黒いお着物の断髪の方が点前をされたが、とてもゆっくりで、目がつまづきそうになった。

約束事について。

行台子の棚。利休好み。紹鷗好み。珠光好み。などありますが、私は見たことはありません。利休好みより、大きいものの方が楽ですよ。(といったのかどうか、最後にわざわざ質問をしたけれど、尚よくわからなかった。)

風炉は土風呂。朝鮮風炉を使ってはならないということはないでしょう。けれども、家元が土風炉を使われるので、それで(合わせてそれに従って)よいでしょう。[参考:飯田先生の書かれた資料、真の眉風炉・大日本茶道学会の挿絵、朝鮮風炉]

釜については、(受講生たちに問いかけながら)規則はありません。なんでもいいんです。

水指。国焼き。瀬戸の一重口がベスト。(というような言葉を選ば柄れていた)

建水は唐金。蓋置は火屋。これもカネのもの。杓立ては、金でも焼き物でも構いません。

まあそれから、八卦盆ですね。八卦は、後天図と、前天図(先天図のことか)があります。これはまあ、中国のものの考え方ですから、よくわかりません。この話を始めたら、一時間でも二時間でもかかってしまいますから。裏千家では後天図を使います。時々、違うのを買う人がいますから、よく見てください。そうでないと、場所が違いますから。

お茶は、正客、次客が、一つの茶盃で点てたものを二人で喫む。次客が一口喫したあたりで、正客が亭主と問答をする。

お点前さんの問答。

お茶銘は。●●宗匠？(鵬雲斎か？河村忘れた)お好みの松柏でございます。

お詰めは。小山園でございます。[何か稽古用に仮定でいうのではなく、本当に東京道場が使っているものをそのまま言ってしまったのではないかと思った。松柏は熊野社中では長年薄茶で使用しているお茶]

お菓子のご製は。萬年堂でございます。という答えがあったのち、渡辺業舂より「相手に下駄を預けると楽になる」というようなもので、とおっしゃられていた。

一つは水菓子(果物など)。あとは、金団・練り切・上用・竿もの・●●(垣内さんがお饅頭と最後のは言ったかと思ったとのこと。さりとて言い飛ばしてしまったのでよく聞き取れない)、下駄を預ける比喩とどういう関係かよくわからない。一つ一つのお菓子が全部違う製造ということだったか。それを亭主に答えさせるのが楽だというお話か？

お茶盃のご伝来は。答えは全然聞き取れなかった。

お茶入のご伝来は。伊達家伝来のイワキ文林でございます。

お茶杓のお作は。玄々斎精中でございます。御名は。聞き取れず。

御仕服の御裂地は。これも聞き取りずらかったが、タスキというような音が聞こえたので、鳥襷緞子か。

(★多分間違えて聞いていないと思うけれど)茶入より、茶盃がすごくなくていいです。

天目茶盤の扱いについて。

建水に湯水を捨てる時は、左手は、普通の茶盤と違い、稽古用の天目茶盤はともかく、本物の天目茶盤はですよ。高台が●●(ありませんのでというように聞こえた)なので、普通の茶盤だったら高台に手をかけますが、底をさし通り(あるいはさしわたり)ます。

天目台に置くとき。両手で抱えるような手つきをお見せになり、こうして抱えるように持つので、はいそうです。それでは、天目台にどうしたって当たるわけですから、開くんです。ぐわっと開いていいです。そうしないと置けません。

<http://www.mitene.or.jp/~oono/tea03-60.html>

No.60 竹台子について

行台子とも呼ばれる。

最初に村田珠光が白竹に桐木地で好んだのが武野紹鷗に伝わり、利休の時に現在の小形になった。

珠光・紹鷗のときは真台子の大きさであったらしい。

『茶道筌蹄』にも『伝不白手前書』にも『天然宗左ヨリ弧峯不白聞書』

にも「珠光好」とある。

『和漢茶誌』には「或人云フ、紹鷗始メテ之ヲ作ル」とある。

現在使われているのは利休好みの小のほうであり桐木地竹四本柱です。

寸法は天板 長さ二尺四寸八分 (約七四・四センチ)

幅 一尺二寸七分七厘(約三八・三センチ)

厚さ 五分五厘(約 一・七センチ)

地板の長さ・幅は天板と同じで

厚さ 一寸二分 (約 三・六センチ)

竹柱の高さは一尺八寸一分 (約五四・三センチ) である。

柱は、三節を客柱(右手前)と角柱(左向う)に、二節を向柱(右向う)と 勝手柱(左手前)にする。

ただし、三節一本の時はこれを客柱に用いる。

元来、地板は根のほうを勝手付に、天板は根のほうを客付にする。

炉用とされているが風炉に使用するときには小風炉を用いる。

参照文献

『原色茶道大辞典』 淡交社

「角川茶道大事典」 角川書店

「茶道具の基礎知識」 野村瑞典 著 光村推古書院

贅沢な道具です。元来は、一枚板を使います。これだけの厚みの一枚板の桐材は、大変です。また、一枚板は、反ります。だから、よく何枚か合わせてあるでしょう。反らない一枚板の木材は、それなりの処理をしている木材ということになります。上の天板の方には、反らないように、木材がはめ込まれていますね。

見た目は地味ですが、贅沢な道具というのはそういうことです。大変な贅沢な道具です。

順番を追いかけるのも要りますが、順番というのは、こう考えてください。できていて当たり前。この行台子は、行台子をしているという点前の(様子の)格が大切なのです。それが、大事なのです。(ここまで言われると、お点前さん、すこし、げげ、というような調子を表現する。)それを理解してください。そうすると、大体皆さん、ゆっくりされます。しかし、ゆっくりするといいいいということではないのです。もちろん初めてやり出した時は、一つ一つのことを、じっくりやってく

ださい。しかし長年やっていくと、初めにやっていたところと当然違ってくるはずですよ。それが当たり前なのです。

■濃茶付き花月。更好棚を使用。

予定の紙には、台子を使った濃茶付き花月をするということが印刷をされていたため、座敷内受講生たちの心づもりは、台子の花月をご指導いただく予定であった。ところが予想とは違い、更好棚を用いた、各服で点てる通常の濃茶付き花月であった。楽茶盃が用いられてはいなかった。濃茶付き花月の際に、楽茶盃でなくても、古帛紗は使わなくていいですとのこと。

講習後に垣内氏が道場の係をされていた方、(カワムラさん?)に尋ねる。本日の濃茶付き花月の際、台子を使う予定ではありませんでしたか。どうして普通の棚でしたのですか。と質問をした。これについての回答は、最近宗家がこの花月をやらないから。ということで棚が変更になったという説明だったとのこと。薄茶の花月なら違ったのかどうか、未確認のため詳細は分からない。どうやら、昨日一昨日の同じ科目で行われたはずの花月は、皆、行台子を使った花月であつたらしい。つまり、金曜の本日この日から、渡辺先生によって?か、普通の棚に変更となり、これ以降は、行台子を使った濃茶付き花月の指導はなくなるであろうという見込みらしい。[たまたま宗家が最近していないことと、全国の弟子がこの行台子を使った花月の式を学ばないことと、連動をする必要があるとは、河村には未だ理解ができないので不可解な事件である。]

仕覆を脱がせて置く時であったか、拝見に出す時か忘れたが、緒はある程度整えることはするけれども、袋の部分をそう触る必要はありませんと、比較的強調されていた。(おそらく、大事な仕覆の生地が稽古のたびに触られ傷むことをすこしでも緩和させようとする意図なのだろうと思われる。河村感想)

どんなに当たるといっても、一人二回以上はお茶も点前も当たりませんから、そんなに当たりませんよ。

更好棚について。

玄々齋お好みの、更好棚。日本全国大変よくどこにでもありますから、これの本歌が出ていても、誰も気が付かないですよ。ちょっと可哀そう。溜塗のもの。

●●(いっかん?ちがう気がする)の円卓も同じです。(あまりにあちこちにあるので、本歌が出てても誰も気づかないし、ありがたがらない)

以上で講習が終わって、質問を受け付けるということで、どなたか一人が何か質問をされた。その後、私と垣内氏と、質問をした。

利休好みではないから、楽、ということでしたでしょうか。よく聞き取れませんが、と行台子の棚のことを再度聞いたが同じことを言われ、はっきりしましたかということで、わからなかったけれどとりあえずはいといった。要するに利休好みのものは、小さい。大きいのがある。紹鷗好みとか珠光好みとかあるらしいけど見たことがない。真の台子など大きい。大きいのはもっと大きいのがある。

小さいのはやりにくい。この棚は大きめなのでやりやすいでしょう。(私が江戸のいつからかに作られたのですかときいたけれど、ですから利休好みですからとのことで話がかみ合わなかった)

もう一つよろしいでしょうかと。

茶杓について、お稽古では、いつごろのものを答えるのがよいですか。と質問をした。

いつでも構いません。

玄々斎は伝授したときに送っていたみたいです。

円能斎までは、皆上げたみたいです。(弟子が行台子まで納めたら、記念に茶杓をもらう)

茶入は中興名物を使ったりするものですが、円能斎くらいまでは、そんなに、今のように開かれて誰にでも教えてなかった。中興名物を持っている人、持てる人か、そんなような人にしか教えていなかったの。

淡々斎より後は(数が多すぎるようになったため)、まあ、見ません。

[私が聞きたかったのは、講義講師によっては、利休くらいのをいう。とか、小庵宗淳くらいのをいうとか。元節の茶杓が、もともと、高い材質のものが手に入らず、竹で侘びたものを開発して作った。ということが、かなり昔の2代くらいまでの話であったかと思っていたので、(確かに町田先生が、玄々斎あたりが確か、当時は女子の一番上の奥伝として納められるものが行台子までで、そのころは茶杓を賜っていたといわれていたのを覚えている。)それらの歴史を知りたかったので一応話を振ってみた。]

行台子が、表(千家)では今も一番上。裏千家は真の台子が今一番上。大円の草は、円能斎がつくった。つまり、淡々斎くらいからなのです。人に見せるようになったのが。つい最近のこと。だからまあ、なんというか、あまり、言いたくないというか。答えられないというか。ということなんですけど。わかるか、というような調子(で私を見る)なので、一応、よくわかりましたというような感じで、私は深く頷いておいた。[つまり、秘伝の奥伝であったものであるため、こうして、大勢の一般弟子に教授すること自体が、宗家の代わりに出張している自分では、大っぴらに話をしていいのかどうか、はばかりれる気がするので、言わないにしくはないということをご説明されている。][全般的に、私が体験している町田先生や、金沢宗維先生などのご講義は、一般大衆弟子の私には貴重だと感じた。]